Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

アリストテレスにおけるアナロギアの諸相

茶谷，直人

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,27:37-49

(Issue Date)
2015-12-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010338

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010338

アリストテレスにおけるアナロギアの諸相

茶谷 直人

1. はじめに

西洋哲学の歴史において、アナロギア（analogia 類比）概念を前面に打ち出しつつ自らの哲学的教説を提示した代表者がトマス・アクィナスであることは、一つの共通見解であろう。そしてこのことはもちろん、被造者と神の関係に関してかれが「存在のアナロギア（analogia entis）」なる理論を展開したからに他ならない。存在のアナロギアについてここで詳述しないが、その内実を簡略にのみ表せば、「神と被創者たる人間は共に存在者（ens）である―＜存在する・在る（esse）＞という同一名称が附される―が、ただし神と人間におけるそれぞれの名称は同義ではなく、神における esse は神の本質（essentia）そのものを成す一方、人間における esse は神の存在に依拠して成立しており（つまり存在と本質は同一ではなく）、神の esse を分有しているという関係にある」ということになろう。つまり、「存在」という名称が神と人間において同義でも異義でもなくまさにこうした仕方で適用されるという事態に、「アナロギア的」という表現が附されるのである。

ところで、哲学史的観点からこの教説と古代哲学との関連を考えるならば、一般的に言ってこの教説には二つの大きな系譜的背景があると考えられる。(1) まず第一に、アリストテレス『形而上学』Γ巻第 2 章におけるいわゆる「存在の帰一的構造（プロス・ヘン構造）」の議論―「在る」は多義的に語られるが、第一義的には実体に属し、量や質といった残余のカテゴリーにおける「在る」は実体としての「在る」との関係において付帯的・二次的な仕方で語られるという主張―である。この帰一的構造は、中世においては「帰属のアナロギア（analogia attributionis）」として捉え直される。(2) 第二に、プラトン的イデア分有思想―個物についての普遍概念（e.g. 人間、犬）や評価概念（e.g. 善、美）による述定は、当の概念そのものたるイデア（e.g. 「人間そのもの」「美そのもの」）の分け前に与る（metechein 分有する）ことによって成立するという思想―である。つまり、教科書的な纏め方をすれば、「トマスはアリストテレスから＜存在のアナロギア＞という発想を採り入れ、そこにプラトン的分有思想を新プ

ラトン主義経由で加味することで独自の教説を案出した」ということになる。こうした理解からすれば、「アナロギア」という知見そのものは、アリストテレスを出自とするということになる。

しかし、ここで次のことを注記しておく必要があろう。第一に、アリストテレスの思索には、(1)のみならず、随所にかつ多様な仕方でアナロギアが見出されるということである。第二に、実はアリストテレス自身は、(1)の議論そのもの（プロス・ヘン構造＝いわゆる「帰属の類比」）を「アナロギア」という呼称で特徴づけてはいないということである。実はこの議論では、「存在は多義的である」（*Met.* Γ2, 1003a33）と表現はされても「存在はアナロギア的である」とは言われないし、むしろ、プロス・ヘン構造はアナロギアでないとの立場を読み取り得る箇所も存在する（NE. A 6, 1096b27f）[(1)]。

では、そもそもアリストレス哲学におけるアナロギアは、如何なる基本的様式と諸相を有し、また如何なる背景的・系譜的側面を有するのか。そして、トマスがアイディアを得たとされるプロス・ヘン構造の議論と如何なる関係性を有するのか。これらの問題関心から、私は本研究ノートにおいて、「アリストテレスにおけるアナロギアの諸相」の敷衍を中心的に行ないつつ、それとの関連の範囲内において、哲学史的経緯の考察、およびトマスにおける存在の類比との距離測定をも併せて行ないたい。それによって、アナロギアがアリストテレスの思索において「トマス前史」という意義に留まらぬ仕方でそれ自体として豊かな内実を有していることを示すと同時に、アリストテレスはなぜプロス・ヘン構造をアナロギアと呼ばないのかという疑問にも対処する見通しである。

2. アリストテレスにおける「アナロギア」の基本的規定：比例的四項図式

アリストテレスの思索において現れるアナロギアがいかに多様であるとは言え、概念の内実の扱いには押し並べてデリケートであった彼らしく、アナロギア（或いはアナロゴン）に対して単一の一般的規定或いは焦点的意味をかれは明示的に与えている。それは次のように明快に定式化されたものである。

> 「A が B に対してあるように、C が D に対してある」（*Met.* Θ6, 1048b6-8, *EN.* E3, 1131a31-b3）

「アナロギアとは、少なくとも四つの項において成立する」（1131a35）

アリストテレスはこの＜A：B＝C：D＞という四項図式（かれはこれを「幾何学的比例（analogia geômetrikê）」と呼ぶこともある　*EN*. 1131b12f）を、各項の総数や内実の多様性如何を問わず、少なくともこの条件さえ満たせばアナロギア（アナロゴンな関係）が成立しているという意味でのミニマムな定義と捉えていると思われる。この図式を満たさない事例にアナロギアの名称が附されていると読むことも可能なテクスト箇所―等差数列的な数的関係性に「算術的アナロギア」という特徴づけがなされていると読み得る箇所（1131a34-32a2）―もあることを措けば[2]、基本的にこのミニマムな規定は、そこにアナロギアという事態が成立していることを彼が自覚していると思われるすべての場面で保持されている。ところで発生論的に言えば、この四項図式的理解はもちろん数学由来のものであり、その発想は、万物の支配原理として数を設定したピュタゴラス派の思想にまで遡ることができる。ピュタゴラス派の人々は輪廻転生や奇異な戒律で知られる秘教的集団を形成した一方で、弦楽器の弦の長さの単純な整数比が音程を形成する（e.g. 1:2 はオクターブ、2:3 は 5 度）ことをヒントに、本来感覚によって認識され得ない（つまり知性によってのみ捉えられる）ところの数的比例が感覚的世界の原理を支配しているとの教説を展開した。

この一般的定義が彼の教説に直接的な仕方で適用されているのが、『ニコマコス倫理学』における有名な「配分的正義」の理論である（NE. V3）。ここで言う「正義」とは、広義の正義（対他的観点において諸徳が充実した状態）ではなく個別的徳の一種を指すものだが、何らかの観点に応じて比例的に様々な価値（自由や富など）が各人に配分されることが「配分的な正しさ」と呼ばれ、一方比例に反する仕方で配分されることが「配分的な不正」と呼ばれる。配分的正義は、例えば仕事量に応じた報酬配分の場合なら＜A の仕事量：A の報酬＝B の仕事量：B の報酬＞というように、四項図式が明快に当てはまるものであり、アリストテレス自身によるアナロギア概念の定義を単純に適用した代表例と言ってよい。

一方、『形而上学』Λ巻における原理論にも、同じ仕方での適用場面が見出される（Λ4）。それぞれの存在者を構成する要素・原理には、例えば事務机と絵画においてそうであるように、個別的にも類的にも、安易な比較や類同化を許容しない差異が多くの場合存在しする。しかし、存在者が原理が如何に多種多様であれ、＜形相＞と＜

形相の欠如態＞と＜質料（変化の基体）＞がそれぞれに見出されるというまさにその点においてはどの存在者も「同じ」であり、これによって存在者の原理に関する包括的言説―つまりありとあらゆるものをまさに「在る」限りにおいて考究する存在論（勝義の哲学）の営み―が可能となる。例えばタイプレヴェルで言えば、色においては白と黒と表面が、一日のサイクルで言えば光と闇と空気が、技術品で言えば形とその不在と素材が見出されるように（1070b18ff）。こうした意味での「同じ」という事態を、アリストテレスは「アナロギアによって（kata analogian）同じ」と呼ぶ。ここでも、＜白：黒：表面＝光：闇：空気＝...＞という仕方で、先の比例的図式が適用されている。またこの線のアナロギアの用例は『政治学』でも見られ、例えば、動物の身体部分のバランスと国家における国民の階層のバランスとが類比的に捉えられつつ、このバランスの喪失が国政の変革に繋がる（eg. 富裕層の過度な増大―比例状態からの逸脱―が民主制から寡頭制への変革要因となる）といった主張がなされている（e.g. Pol. E3, 1302b33ff. cf. B10, 1271b40-41, B11, 1272b37-38, E1, 1301b26-27）。

3. 方法としてのアナロギア

ところで、これまでの事例では、アナロギアの基本的定義を際だたせるため、定義が端的に適用されかつ理論自体がアナロギアであるような事例を選択的に列挙し、一般的に言って（つまりアリストテレス哲学の文脈に限らず）アナロジーが事柄としてもつはずの認識論的・方法論的な側面をあえて捨象してきた。しかし、以下で私が強調したいのは、実を言うとアリストテレスの思索においてこうした単純な場面は稀であり、むしろ後者の側面、すなわち「認識様式としてのアナロジー」―我々に馴染みの事象（＝ベース）から把握が目指される事象（＝ターゲット）を類比・類推的に認識すること―こそ、アリストテレスにおけるアナロギアの主要場面だということである。

まず、アリストテレス存在論の主要概念装置である「可能態」と「現実態」が如何なる概念なのかを主題とする『形而上学』Θ巻における次の議論を例に考えてみる。そこで彼は、両概念の内実は定義的認識が不可能であるとした上で、代案として次のように述べている。やや長いが引用する。

「［可能態と現実態が何であるかは個々に定義できないのであり、］類比関係（analogon）を

洞察する必要がある。つまり、建築中の者が建築可能な者に対してあるように、覚醒者が睡眠者に対して、見ている者が目を閉じている者に対してあり、また同様に、質料から切り取られたもの［形相］が質料に対し、完成したものが未完成のものに対してある。この区別の一方によって現実態が、他方によって可能態が規定されるとせよ。ところで、「現実態において」とはすべて一様に語られるのではなく、類比関係（analogon）によって語られる。つまり［ここで言う類比関係とは］A : B＝C : D のことである。つまり、［現実態のうち］あるものは能力［A］に対する運動［B］として、あるものは質料［C］に対する［形相的］実体［D］としてある」（*Met.* Θ6, 1048a36-b9）

ここでアリストテレスは、可能態–現実態関係にあると言えるような具体的諸事例の枚挙により、各事例に見出される類比関係を総覧的に掴む（synorân）ことが両概念を理解する唯一の方法だとしている。ただし、ここで注目したいのは、アリストテレスが諸事例の類比関係を最終的に＜能力 : 運動＝質料 : 形相＞という四項図式に収斂させていることである。この四項図式化における彼の狙いを、アナロギアの定義にできるだけ図式的に適用させるための単純化にあると見ることも不可能ではない。しかし、実は彼はこの議論に先だって、前者の対（能力 : 運動）を日常言語における語用例に則した平明な事例として捉えた上であらかじめ検討を行い（Θ1）、その上で、後者の対（質料 : 形相）―平明さにおいて劣るものの自らの哲学における核心的な概念装置―の内実を類比的に示そうとしている。可能態–現実態の枠組みを質料形相論に重ね合わせることこそ、かれの存在論における核心作業の一つであり、またデュナミスとエネルゲイアをかれ独自のテクニカルタームとして用いることを意味する。この四項図式でアリストテレスは、能力と運動（或いは英語で言えば power と movement）というわれわれに馴染みの日常概念から、自身の哲学における独自のテクニカルターム（質料・可能態としてのデュナミス、形相・現実態としてのエネルゲイア）を類比的に理解させようとしている、と考えられる[3]。

実はこうした「方法・認識としてのアナロギア」には、学問的探究の方法に関する一般的テーゼ、つまり「われわれにとってより先なる事柄から、事柄そのものにおいてより先なる事柄へ」という方法論が反映されていると思われる。ここで言う「われわれによってより先」とは、現象レヴェル（感覚によって自明的に把握することのできる経験的事象・事実）と言説レヴェル（例えば定説化した先行研究・通念・常識・

伝統）の二つの側面を含むものと思われるが（cf. *NE*.Vll1,1145b2-7）、彼は、それらの誠実かつ批判的な検討を通じて容易には到達し難い普遍的真理や知的認識へと上昇するという方法こそ、探究の合理的な途であると考えている。アナロギアは、こうした探究順序を実現する一つの典型的な手法であったと言える。

この種のアナロギア（アナロジー）がアリストテレスによって駆使されているのが、自然哲学の領域、なかでも、いわゆる自然の目的論（natural teleology）を提示する場面である。アリストテレスは、『自然学』『動物部分論』『デ・アニマ（魂論）』などの自然学著作で、有機体およびその諸部分の存在・生成に一定の目的性が見出されることを主張している。そしてそのさい、人工品制作に見出される目的性からのアナロジー（テクネーアナロジー）という仕方で、目的性の存在とその内実を説得的に示そうと試みている（esp. *Phy.,* B8）。ここで言う「目的」の内実に関するテキスト上の立ち入った分析はここでは割愛するが、結論的に概略を示せば、自然全体を統括する究極的目的や擬人的な意図的目的を意味するわけではなく、「生物自身の生存（種的形相の存続）を目的としその実現のために各器官が機能を備える」という内在的かつ生物にその場面を限定した目的論がアリストテレスにおいて想定されている、ということになる[4]。そしてこうした「有機体目的論」を弁証するために、テクネ-アナロジーが多様かつ複雑な論点のもとに駆使されている。例えば、

1) 道具に見出される一定の機能性から、有機体器官における機能（目的性）、またさらに、身体に対する魂の関係性が類比的に理解される。
2) 技術品制作における過失（hamartia）概念から、有機体発生時における奇形の発生が類比的に理解される。
3) 制作における目的そのもの（eg. 家の完成）に関する制作者の思案の不在から、有機体の目的適合的生成（eg. 蜘蛛の営巣）における意図の不在が類比される。

といった具合である。こうした議論でテクネーアナロジーを用いる一つの要点は、言うまでもなくその認識論的側面、つまり「我々にとって目的性の存在が自明であるところの技術的事象」から「技術的事象ほどには一見自明でない有機体事象の目的性」を類比する、という方法論的側面である。各種技術とその産物である技術品はそもそも人間自身が特定の目的（eg. 建築術においては居住、医術においては健康）を設定した上で開発したものであるがゆえに、そこに見出される目的性を類比のベースとすることは、説明の途として理に適っていると言える。

ところで、アリストテレスにおけるテクネーアナロジー（或いは一般的に言ってアナロギアにおける認識論的側面・上昇性）を歴史的観点から考えるとき、その背景にプラトンが見え隠れすることを想起せざるを得ない。プラトンにおける（方法としての）アナロギアの主要ターゲットとなる事象は、人間の魂に関わる事象つまり倫理的事象の認識、或いはイデアの認識である。たとえば初期対話篇ではしばしば、われわれに感覚可能な具体的・現象的世界における技術（医術や制作術）をベースとしつつ、＜身体の健全化を医術が事とするのと同様に魂についてもそれに関わる何らかの知が存在するはずである＞といった仕方で、道徳的事象を対象領域とする何らかの専門知の存在が（その捉え難さが示されつつ）要請される（*eg. Euthydemus*, 291D-292C）。また、イデア論の提示を前面に押し出したより高度なアナロジーとしては、『国家』における有名な「線分の比喩」を挙げることができる（V20-21）。そこでは、可感的世界における個物の似像（例えば水面に映る像）と個物との関係が、可感的世界全体と叡智的世界全体との関係に類比され、さらには叡智的世界の内部における数学的対象と哲学的認識の対象（つまりイデア）との関係にも類比される、という複層的なアナロギアが展開される[5]。ここでのアナロギアは、あくまで可感的世界における個物とその影像という馴染みの事象をベースとしつつ多層的な類比関係を開示することによって、叡智界にあるイデアの内実を対話者に垣間見させることを意図している。その他、個々人における魂の諸部分（感覚・気概・知性）の関係から共同体における成員（民衆・軍人・施政者）の関係が（これも『国家』の第4巻で）類比されるなど、プラトンにおいては認識の方法としてのアナロギア（言わば「上昇のアナロギア」）が駆使されている。アリストテレスはその教説そのものに関しては結果的に師と袂を分かつとはいえ、総じて先人の所産を可能な限り尊重する彼の基本的姿勢を考えれば、師の用いたアナロギアの説得的有益性を肯定的な仕方で念頭におきつつ自らの思索を展開したと考えるのは不自然でないであろう。

4. アナロギアにおける認識的先後関係と存在論的先後関係の相克

これまで、アリストテレス（およびプラトン）の思索においてアナロギアがアーギュメントの一手法として駆使されていることを見てきた。ところで、ここで方法としてのアナロギアについて、哲学史的観点抜きに、つまり事柄としてその意味・有効性を鑑みるときに生じる、一般的な問が考えられる。それは、そもそもなぜアナロジー

は―少なくともアリストテレスにとって―アーギュメントとして成り立つのかという問である。学問的論証においては、（アリストテレスの表現に倣えば）それ自体証明を要しない無中項命題（定義命題）を究極的前提とする推論の連鎖が一つのモデルとして考えられるが（*APo.* A2）、言うまでもなくアナロジーにおいては、類比のベースにそのような確実性は確保されていない。もちろん、アナロジーを純粋な修辞的方法として割り切るのも一つの見識であり、アリストテレス自身も『弁論術』で比喩としてのアナロジーの修辞的効果を評価している。例えば、ペリクレスによる追悼演説で、戦死した若者達を偲び「一年から春が取り去られるように戦死した若者達がポリスから消え去った」と述べられたことが紹介されている（*Rhet.* A7, 1365a31-33, Γ10, 1411a2-4）。しかしながら、これまで見てきたように、アリストテレスがその哲学の核心的場面―質料形相論、可能態-現実態論、有機体目的論―において敢えてアナロギアを議論様式として多用している以上、彼自身はそれらを単なる方便とみているわけでないことは疑い難いであろう。では、少なくともアリストテレス自身は、なぜアナロギアがアーギュメントとして成立する―別の言い方をすれば、当の類比がまさに類比として図式的に成立する―と考えていたのであろうか。

これを考える一つの手がかりがある。アリストテレスは『自然学』で有機体目的論の弁証のため先述のテクネーアナロジーを遂行するその最中で、次の有名なテーゼを提示している。

> 「一般的に技術は、一方自然が成し遂げ得ないことを成し遂げ、他方自然を模倣する」（*Phy.* B 8, 199a15-17）

この主張は周知のように伝統的芸術観との関連でも問題となる非常に一般的なテーゼであるが、今の文脈で重要なのは、「技術は自然を模倣する」という部分（技術の自然模倣説）である。アリストテレスはこの模倣テーゼに続いて「そこでもし、技術によるものが何かのためなら自然によるものも明らかにそうである」（17f）と結んでおり、このテーゼを、テクネーアナロジーによる自然目的論の弁証という方策の有効性を根拠づける命題として提示している。ここで言われる「模倣（mimêsis）」概念の内実を考えることはそれ自体思想史的な広がりを孕んでいるが、とはいえ少なくとも有機体目的論という文脈に則して考える限り、そしてアリストテレスが「自然」「技

術」と呼称する際には「自然物」「技術品」ではなくそれらの原理（erchê, aitia）を通常想定するという事実（*Phy.* B1）に注意を払う限り、次の理解が導かれよう[6]。つまり、ここで言われる「模倣」とは、自然的事象と技術的事象にはその原理において共に目的論的構造を有し、かつそうした構造は自然において本性上「より先」なるものであって技術の側はそれを追随的に共有する―すなわち「自然がより先、技術がより後」という序列性が目的論的構造に関し存在する―ということである。とすれば、模倣テーゼは、テクネーアナロジー（認識レヴェルにおける自明性の点ではより先なるものからより後なるものを弁証する作業）を下支えする役割を果している、つまりアナロジーなる図式（四項図式）がまさに図式として成立する根拠として存在していると考えられる。

ここで、「われわれにとって先なるものから本性上先なるものへ」というアリストテレスの基本的探究姿勢を今一度想起し、次の点に注目する必要がある。すなわち、実はこの探究姿勢は、探究上（認識上の自明性）の先後関係と本性上の（存在論的な）先後関係の相克によって成り立つということである。そしてこのことは、テクネーアナロジーにおいて類比の焦点（目的性）が実は自然の側により優れた仕方で見出されるという事態に即応している。そしてこうした先後関係（上昇と下降）の相克は、可能態と現実態を示すアナロギアにおいても見出されるように、アリストテレスが用いるアナロギアという方法そのものに内在する性質であると言えよう。

考えてみれば、プラトンにおけるテクネーアナロジーや線分の比喩におけるアナロギアにもこれに親近的な事態は見出されるかもしれない。つまり、たとえばこうした方策が対話の受け手によるイデア理解のために有効であるのは、そもそも対話相手が何らかの仕方でイデアの存在を―ぼんやりとであれ―直観するための構えを有している（イデア認識に到達する潜勢的状態を保持している）場合に限られているはずである。そうした態勢抜きに聞き手に差し出された卑近な例はまさに卑近なレヴェルを超越して理解され得ないであろうし、対話篇の中でのソクラテスも、当の対話相手がイデア直観の兆しを見せる者―つまりは愛知者（philosophos）の資格を有する者―であるからこそ、アナロギアという方策を対話相手の素質に応じて選択的に開示していると考えることができよう。

5. 「存在は類比的に語られる」？

さて、以上の議論を総括する前に、トマスとの関連において最初に示された疑問を処理しておきたい。つまり、「アリストテレスにおける「存在の帰一的構造（「プロス・ヘン」構造）」の議論はなぜアリストテレスによってアナロギアと呼ばれない―つまり「存在はアナロギア的」という表現は見出されない―のか」という疑問である。『形而上学』の当該箇所におけるかれの主張は次の通りである。

> 「「在る（to on）」は多くの仕方で語られるが、ただし同名異義的にではなく、或る一つのもの・単一の本性［実体］との関連において語られる」（*Met.* Γ2, 1003a33f）。
>
> 「「在る」は［カテゴリーの数だけ］多くの仕方で語られるが、それら［諸々のカテゴリーのうち］第一義的な意味での「在る」は、実体を意味表示する限りでの「何であるか」である」（Z1, 1028a13-15）

つまり、実体としての「在る」（eg. 「ソクラテス」「人間である」）は最も優れた仕方での「在る」である一方で、その他のカテゴリーは、「色白である」（性質）「長身である」（量）がそうであるように、「実体としての在る」との関係において二次的に語られる「在る」であるとされる。そしてこの主張は、「健康的（hygieinon, 英語で言えばheatlhy）」という形容詞に見出される事態と類同化される（1003a34ff.）。すなわち、「健康的」という述定は「（健康な）人間」だけでなく「食物（eg.野菜）」にも「顔色」や「尿」にも適用されるが、「人間」への述定は健康の所有者という意味における適用である一方、「野菜」は健康をもたらす要因として、「尿」や「顔色」は健康の徴として適用されるものである。つまり、「健康的」という述定は健康を所有する人間において最も端的な仕方で語られる一方で、その他のものにおいては健康な人間を所在とする「健康」との関係において述定可能となるという差異が存在する。この「健康的」の事例との類同化によって「在る」を理解するとき、1）実体こそが最勝義の存在であること、そして、2）「健康的」という述定が適用される諸事象を「医術」という単一の術が扱い得るのと同様に、本来的に多義的・多様な「在る」に関して実体論（実体とは何かの探究）という単一の学が扱い得るということが了解される。

さて、このプロス・ヘン構造が「アナロギア」でないことはもはや明瞭であろう。というのも、＜人間：健康＞の関係は＜尿：健康＞と、＜実体：存在＞の関係は＜色

白：存在＞とそれぞれ同一ではない以上、「健康的」の事例も「在る」の事例もアリストテレスがアナロギアに求める四項比例図式を保持していない。これは、関係性の差異こそプロス・ヘン構造（そしてトマスにおける存在のアナロギア）の核心であることを考えれば当然のことである。また、プロス・ヘン構造それ自体には、アリストテレスのアナロギアに見出される方法的側面（アナロギアにおける上昇性）を見出すことができない[7]。そしてトマスにおける「存在の類比」も、＜神：存在＞関係と＜被造者：存在＞関係の差異こそを理論上の焦点とする以上、比例的な四項図式を保持してはいない[8]。

6. 総括

再び本題に立ち返り、以上の議論を総括しておく。アリストテレスは、＜A : B＝C : D＞という比例的四項図式をアナロギアの基本的定義として規定しており、この数的比例という発想は、音程論を端緒とするピュタゴラス派の＜数＝可感世界の支配原理＞思想に遡ることができる。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』における配分的正義の理論や『形而上学』における存在者の原理論において、この図式を典型的な仕方で理論そのものの中に組み込んでいる。ただし、アリストテレスにおけるアナロギアの核心は、理論そのものへの適用よりむしろ、この四項図式を保持しつつ「方法としてのアナロギア」を駆使したことにある。それは、有機体目的論の弁証におけるテクネーアナロジー、可能態—現実態論の類比的把握など、かれの教説を主題的に論じるその中心場面において敢えて用いられている。アナロギアの方法的側面は、プラトンの対話篇のうちにその雛形を、魂の領域やイデア認識へと対話相手を導くための具体的方策として見出すことができる。アリストテレスにおける「アナロギアの上昇」は、「われわれにとって先なるものから事柄そのものにおいて先なるものへ」という自身の基本的探究姿勢の一つのあらわれとして機能するという意味を有する。ただしアリストテレスにとってアナロギアという方策は、認知的側面を有するだけでなく、模倣テーゼにおいて示されているように、類比の論点が「類比されるもの」（ターゲット）の内に優れた仕方で存在するという事態が見出される場面において用いられるものであり、この事態は、かれの思索におけるアナロギアがアーギュメントとして成立することを基礎づけるという役割を担っている。

この基礎づけは、あくまでアリストテレスにとってのものに過ぎないと言ってしま

えばそれまでである。しかし、われわれがなんであれアナロジーなる認識様式を議論において用いようとするとき、そこには何かアリストテレスに連続する掴みが予在しているように思われることもまた否定し去り難いのではないだろうか。

註

(1) 後述の註7を参照。

(2) この箇所はいわゆる「矯正的正義」（eg. 犯罪による被害者の損害と同等の刑罰を加害者に課し利害の均衡（等しさ）を保つこと）が論じられる箇所である。ただしこの箇所については、次のように読むことができる（［］内は発表者の補足）。「［ここで言う＜等しいこと＞＜等しくないこと＞という意味での正・不正は］かの［配分的正義における］アナロギアに則してのもの［等性・不等性］ではなく、算術的な意味でのものである。」つまり、アリストテレスによって（しばしば命名されるような）「幾何学的アナロギア」と「算術的アナロギア」という分類がなされていると解する必要はないのであって、むしろ＜等しさ（ison, isotês）＞をめぐり「アナロギア的（＝幾何学的）な意味での等しさ」と「算術的な意味での等しさ」という対比がなされていると解せば、四項図式をアナロギアのミニマムな定義としてテクスト上齟齬も例外もなく理解することができる。

(3) テクスト分析については次で行なっているが、ここでは詳細は割愛する。茶谷直人「アリストテレス『形而上学』Θ巻におけるアナロギアと二つのデュナミス」『哲学』第55号、日本哲学会編、2004年pp.218-230.

(4) 茶谷直人「自然と技術のアナロジー――アリストテレス『自然学』第2巻における有機体目的論展開の一方策」『哲学』第51号、日本哲学会編、2001年、pp.160-169）で詳述している。

(5) 定式化すれば＜現象世界における個物：その影像＝知性界全体：可感界全体＝イデア：数学的対象＞となろう。

(6) 「自然（physis）」は、自然によるもの（動植物およびその諸部分ならびに元素）の運動と静止に関する自体的かつ内在的な原理として定義される（192b8-23）。これに対比させれば、技術（technê）は制作品の制作の外在的な――つまり制作品ではなく制作者のうちに存する――原理であるということになる。

(7) 実際、『ニコマコス倫理学』A6では、多種多様な事例に（複数のカテゴリーにわたって）適用される「善い」という名称が諸事例間で如何なる意味連関を有するのかが議論される際

に、「プロス・ヘン構造」と「アナロギア構造」が排他的選択肢として提示されている（1096b27f）。そこでは「アナロギア」は<身体：視覚＝魂：知性>という例示のもとに比例四項図式として了解されている。以上の点は、プロス・ヘン構造とアナロギアの差違を示す明確な典拠となるものと思われる。

(8) ただし興味深いことに、アリストテレスにとっては、「健康」の例から「在る」の例に向かう営み自体が、これまで述べてきたアナロギアの特徴――比例図式と類比の方法論的性格――を兼ね備えている、ということは注意する必要がある。これも、アナロギアがかれの思索の核心場面においてあえて多用されることを証示する一例である。

（神戸大学大学院人文学研究科・神戸大学文学部准教授）